

博士論文

臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める
心理教育プログラムの開発

2020 年度

大学院心理学研究科臨床心理学専攻

大矢 薫

東京成徳大学

論文概要

近年の医療技術者養成校における臨床実習では、学内教育レベルとして十分な知識や技術を有している学生であったとしても、コミュニケーションの不足、モチベーションの低下などの要因で、実習が中断または単位不認定となるケースが増えてきている。そこで本研究では、日本の医療技術者養成校において、a) 臨床実習を最後までやり抜く力とはどのようなものであるのかを検討し、b) 臨床実習を最後までやり抜くための心理教育プログラムを開発し、c) その心理教育プログラムを、臨床実習をやり抜くためのレディネスを高めるべく、1年次の学生に対して実施し、心理教育プログラムの有効性を確認することを目的とした。本研究は4つの研究から構成される。

研究1と研究2では、文献研究に加え、臨床実習をやり抜いた大学生、医療技術者養成校で指導している教員、実習先で実習生を指導している実習指導者を対象とする質問紙調査を行い、医療技術者養成校における日本人大学生の臨床実習をやり抜く力に関する探索的研究を行った。結果として、「対人関係」、「知識・技術」、「情意領域」、「自己表現」、「ストレス対処」、「モチベーション（姿勢）」、「相談行動」、「周囲の人々の存在」などが挙がり、日本人大学生の臨床実習をやり抜く力につながると考えられた。これらのことから日本人大学生の臨床実習をやり抜く力を「臨床実習に必要な知識・技術、実習に対する意欲的な姿勢、他者信頼、良好な対人関係構築、ストレスを感じたり困ったりしたときの相談行動から構成される力」と本研究では操作的に定義した。

研究3と研究4では、日本人大学生が臨床実習をやり抜くために実習前に実施しておくの良い心理教育のニーズとどのようなプロセス、つまり、実施形態や方法が適切かを調査し、その結果をもとに「臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める心理教育プログラム」を作成し、その効果検証を行った。結果として、アサーション・トレーニング、認知的再構成法、ソーシャ

ルスキル・トレーニング，援助要請行動，漸進的筋弛緩法から構成された「臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める心理教育プログラム」が完成した。大学1年生を介入群と統制群に分けて本プログラムを実施して効果検証を行ったところ，成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の「主張性」因子得点が，介入群において，介入前に比べて介入後に有意に上昇していること，介入群と統制群との参加者間・参加者内の混合計画において，有意傾向の交互作用が認められ，本プログラムの効果が一部，支持された。

本研究には，複数の限界が存在する。1つ目は，「日本人大学生の臨床実習をやり抜く力」として定義し，本研究で効果測定を行った他者信頼，良好な対人関係，援助要請行動のうち，良好な対人関係の一部にしか有効性が認められなかったことである。2つ目は，効果測定の実験デザインとして，2つの群の性質を等価にすることができず，本プログラムの効果の解釈は慎重に行う必要がある。3つ目は，本プログラムを実施した大学1年生は，臨床実習を行うまでにまだ数年の時間を要するが故に，実際に臨床実習をやり抜けるかどうかはさらなる縦断的な研究が望まれる。以上の限界をふまえ，プログラム，および効果測定の実施方法を精査していくことを今後の課題としたい。